

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02891

研究課題名(和文) 発音学習の効率化に向けた最重要習得項目特定とそれに伴う発音教材の開発研究

研究課題名(英文) Identification of the most efficient important learning items and development of pronunciation materials

研究代表者

中川 純子 (NAKAGAWA, Junko)

慶應義塾大学・総合政策学部(藤沢)・講師(非常勤)

研究者番号：80645961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は次のとおりである。1) 聞き手の理解を最も妨げる日本語母語話者のドイツ語の発音上の問題を分析した。被験者(ドイツ語学習者)の発音についてドイツ語母語話者の理解度を調査し、最優先習得項目(発音のコア・アイテム)を特定した。2) 発音学習を効率化する教材のコンテンツの開発を進めた。コンテンツを広く学習者に利用してもらうため、専用のウェブサイトを立ち上げ、教材内容を公開した。3) 国内外の学習者に広く利用してもらうため、サイトはドイツ語と日本語の二言語で提供した。4) これまで作成した教材及び指導法理論を実験的に、大学授業などで実践に移しフィードバックを受けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の一環として、社会音声学的観点から聞き手の理解を最も妨げる日本語母語話者の発音上の問題を分析し、最優先習得項目(発音のコア・アイテム)を特定した。このコアアイテムを中心とした発音学習は日本語母語話者のドイツ語発音学習を効率化するのに貢献するもので、全ての外国語学習に応用可能な概念である。本研究の成果を広く学習者に成果を利用してもらうために、専用のウェブサイトを立ち上げ、教材内容を公開した他、ウェブ独自の素材も追加した。本研究は当初ウェブ教材を補助的なものと位置づけていたが、現在、ウェブでも紙媒体とほぼ同レベルのコンテンツを置き、ドイツ語でも発信するようにした。

研究成果の概要(英文)：We analyzed the pronunciation problems that arise when Japanese native speakers speak German, which most hinder native listeners' comprehension.

1) The level of comprehension by German native speakers was investigated, and the highest priority acquisition item (pronunciation core items) were identified. 2) We developed teaching materials that optimize pronunciation learning. In order provide these contents widely available to learners, we have published books and CDs, and launched an exclusive website, making teaching materials publicly available. We also added particular web materials to make pronunciation learning more enjoyable. 3) The site was provided in two languages, German and Japanese, so that the learning materials could be widely used domestically and abroad. 4) Experimentally, we used these teaching materials and applied the theory of the methods of instruction in university classrooms, receiving feedback from users.

研究分野：外国語教授法

キーワード：外国語教授法 教材開発 発音教育 ドイツ語教育 音声学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本におけるドイツ語教育の目的は、情報の受容から発信、コミュニケーションへと移行してきており、教材でも会話文が多く収録されるようになってきている。その一方で発音はいまだに扱いが少なく、コースの最初に行われる簡単な導入のみで、発音を段階的・体系的に扱った教材もなく、リピート練習以外に具体的な発音の指導もないなど、外国語教授法の発展の中で取り残された状況である。研究代表者と連携研究者は、これまでの研究において、入門レベルから中上級までの学習者の自律学習を支援し、自らの学習をモニターできるメタ認知能力の育成に重点を置いた発音の指導法ならびにそれを実践できる教材の開発に取り組んできた。紙媒体、DVD、CDを連動させ、学習者の自律学習を可能にする設計を行った。この教材開発では日本語母語話者を念頭に網羅的に音素を扱ったが、多くの学習者にとって発音学習に割ける時間が限られたものであることから、現実には学習者のニーズに応じた目標設定が必要である。発音学習の際にモデルとなるのは母語話者の発音である一方で、母語話者の発音をゴールとするのは非現実的といえる。発音の優先習得項目については、英語教育においてJennifer Jenkins (2000: The phonology of English as an international Language. New models, new norms, new goals : Oxford University Press)が、発音のコアアイテム (the main core items)を提唱している。コアアイテムは多様化する英語において会話参与者相互の理解を保証する共通ラインを保持しようとするLingua Franca Core(LFC)の研究の中で議論され、具体的にリストアップされたものである。さらに、Robin Walker (2010: Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca : Oxford University Press)では reduced pronunciation syllabus(指導項目削減の発音指導シラバス)の意義に関する研究調査が行われている。これらはリンガフランカとしての英語研究の一つであるが、ドイツ語の発音学習に具体的な段階目標を設定する上でも理論的基盤になり得るものである。

昨今のドイツにおける発音教育研究では、語を構成する個々の単音(分節素)ではなくイントネーションやアクセント、また感情を込めた話し方などの単音を超えたレベル(超分節素)の発音学習こそ重要だという考え方が優勢となってきている。先行研究の様々な議論・見解に学び、外国語としてのドイツ語学習者の負担と得られる利益を学習目的と比較し、分節素、超分節素の枠を超えた最重要学習項目を選定することが必要である。

研究代表者と連携研究者は、日本語母語話者のドイツ語学習者にとっての発音の最優先習得項目を Kernmerkmale と名付け、その特定のための方法論の開発及びそれに基づいたパイロット実験を 2014～2015 年に 2 度行った。実験の結果を踏まえ、暫定的な Kernmerkmale を導き出した。

### 2. 研究の目的

本研究ではこれまでの研究成果の評価を行い、残された課題に取り組む:教材及び指導法理論を実践に移しフィードバックを受けることに加え、社会音声学的観点から聞き手の理解を最も妨げる日本語母語話者の発音上の問題を分析し、最優先習得項目を特定する。さらにそれに伴う教材のコンテンツを開発し、発音教育を効率化する指導項目削減のシラバスを策定する。その際これまで行ってきた単音(分節素)の誤用調査に加え、イントネーションや文アクセントなど、単音を超えたレベル(超分節素)の問題も対象とする。

### 3. 研究の方法

2016 年度は(1)ドイツ語の発音教育、認知的学習論に関する文献収集、(2)被験者のドイツ語発

音のデータ収集、次年度の Kernmerkmale 記述に向けた予備調査、専門家との議論を行い、(3)前年度までに製作した発音教材(本、DVD、CD)の評価作業と、連動したウェブ教材の製作を準備する。2017年度は前年度の録音データの分析を基に、Kernmerkmale を特定し、それに基づいた発音学習の有効性について、被験者を用いた実験を行う。2018年度においては前年度の実験の結果とそれまでの研究、専門家との議論を反映させ総合発音教材のプランニングを行う。教材のコンテンツを確定し、音声の収録をドイツのスタジオで行いデモ版を完成させる。2019年度(最終年度)は、教材のデモ版を用いたワークショップを開き成果を検証し音声の最終収録をドイツで行う。教材の仕上げと教授用資料の作成、発音学習シラバスの提案を行う。

#### 4. 研究成果

(1)2016-2017:海外の大学や、ドイツ語以外の言語の教育機関と連携し、ワークショップや意見交換などを積極的に行い、これまでの成果の検証を行った。2016年8月と2017年3月の2回、ギリシャのクレタ技術大学の Anna Vrauvaki 講師とともに、当大学において発音教授法と教育教材についての実験的实践と意見交換のためのワークショップを行った。2017年と2018年にはルードヴィヒスハーフェン経済大学東アジア研究センターの Adachi-Bähr 講師とともに、当大学においてワークショップを行った。対象はドイツで日本語教育に携わる講師、当大学で日本語を専攻する学生である。ルードヴィヒスハーフェン経済大学東アジア研究センターでのワークショップの目的は、ドイツ語発音教育のために開発している発音教授法および教材作成のための方法論およびコンセプトが、その他の外国語教育にもどの程度応用可能か検証することに加え、ドイツ語の発音教育にも新たな観点から知見を得ることであった。

これらの成果を取り入れ、DVD、CD、本の有効な連携について検証を行った。

(2)2018-2019:研究年度後半では行った実験および Kernmerkmale についての議論を反映させた教材の開発に取り組んだ。これまでに作成した紙媒体教材、CD の改定に取り組み、関連したウェブ教材のコンテンツ開発と合わせ、自律学習のための発音総合教材のプランニングを行った。2018年度前半は、練習素材を最終的に確定し、紙媒体の教材を概ね完成させた。年度後半は主としてウェブ教材開発に従事した。本教材は日本のドイツ語学習者を念頭に置いて始めたものだが、方法論的な汎用性を検証するため、ウェブ版はドイツ語に翻訳し、二言語で提供することを目指すこととした。ドイツ語版の作成にあたっては、Goethe-Institut 専任講師 Monika Haas 氏と音声学の専門家である獨協大学講師 David Fujisawa 氏に翻訳のみならず内容も含めた検討をお願いした。実際のメディアの製作は、外国語教材に経験のある業者に引き続き協力を依頼した。教材の暫定版を元に、大学のドイツ語の授業で随時実践を行ったほか、広く一般の学習者を対象とした「ドイツ語発音のワークショップ」を湘南日独協会(2018年1月27日)にて開催し、本教材を用いた実験的な授業を行った。2019年度前半には、紙媒体の教材とウェブ版(日本語とドイツ語の二言語での同時提供)の教材が完成し、実際の授業での利用へ向けた様々な検証と問題解決への取り組みを行った。本研究は当初ウェブ教材を補助的なものと位置づけていたが、現在、ウェブでも紙媒体とほぼ同レベルのコンテンツを置いている。外国語の発音には母語の影響が強く出ることが知られており、日本語母語話者のための教材や教授法は当然、それ以外の母語話者には適切でないものもある。これに関しては2017年に行ったギリシャでワークショップを行った結果、発音教育への認識の低さ、教材不足の状況はギリシャも共通であり、内容的な面でも母語にかかわらずドイツ語の発音に共通の問題を抱えていることがわかり、本教材が日本以外の現場でも利用の可能性があることが示された。ウェブへの重点の移行と日本語のほかドイ

ツ語でも発信するように変更したのは、ギリシャでのワークショップの結果を受けてのものである。

それと並行して、本研究の成果である発音のコアアイテムの学習を動画で提供するための開発に取り組んだ。発音の基礎を動画のシリーズ化することにより、教師と学習者双方の学習へのハードルを下げ、授業に組み入れることの負担を大幅に軽減することを目的とした。しかし、本取り組みは、以下の二つの理由により、完成には至らなかった。一つは教育の現場に発音学習を組み入れるには予想以上の様々な問題があり、現時点ではそれらを全て解決することができなかったことである。これは今後の継続課題として取り組んでいる。もう一つは、ドイツ在住の専門家による音声の録音と教材の内容についての協議を予定していたが、コロナウィルス拡大の影響によりドイツへの渡航を中止せざる得なくなったことである。

さらに年度の後半は、現場の問題を明らかにし、教材開発を進めるために、ドイツ語教育だけでなく、他の言語の現場からも知見を得るため、日本語教育における発音教育の調査研究を行なった。日本でドイツ語教育を行っているのとは異なり、その言語が使われている国で教育を行っている教師の意識、学習者の意識は異なっている可能性があり、そこから「発音教育とは何か」という問いに対して有益な知見が得られるのではないかと考えたからである。日本の大学で教鞭をとる日本語教師のインタビューを PAC 分析の手法で行った結果、具体的な現場での経験と、自らが学習者として外国語を学んだ時の経験が、発音教育観に影響を与えていることがわかった。さらに教師自身がどう教えたらいいのか方法がわからないという不安を抱えているということ、なぜ発音を学ぶのか、ということについて目的意識を持っていないこと、そして教師の間に発音教育の知識においても意識においても大きな差があるということが明らかになった。この結果については、国内外の学会で口頭発表し、論文として掲載された。

(3)まとめと残された課題：研究結果には一定の評価が得られたが、大学等の一般の授業で本教材を使用するための発音シラバスが期間内に完成に至らず課題も残った。その理由は、第一に、総合ドイツ語の中で発音を扱うには想定していた以上に問題が多岐に渡り、期間内に全てを考察しきれなかったことにある。発音が授業に組み込まれにくい理由については、先行研究から時間の不足や教師側の専門知識の不足などが挙げられている。これに関しては先に述べたように、日本で教える日本語教師のインタビュー調査を先行して行ったが、今後、ドイツ語教師に対して PAC 分析インタビューによる調査分析を同様の手法で行う予定である。現在、ドイツでドイツ語を教える教師 3 名(移民のための統合 コースで教えているノンネイティブ教師、実科学校で教えているノンネイティブ教師 1 名、ドイツ語教師の教師研修を行っている教師 1 名)と、日本の大学でドイツ語を教えるネイティブ教師 1 名についてインタビューを終えており、今後分析を継続していく予定である。

さらに他言語の発音教育についての先行研究でも同様の問題が指摘されていたことから、外国語教育全体の知見に学び、他言語の教育専門家にも支援を受け、総合ドイツ語への発音学習の組み入れのためのシラバスの策定と、シラバスを実現するための教材開発に取り組む。また、この研究を始めた頃から現在に至る時間の経過の中で、インターネットや E ラーニング、ウェブ教材の授業が加速的に進み、当初 DVD を想定していたコンテンツの提供を全面的にウェブに切り替えドイツ語と日本語の二言語で提供しており、今後もコンテンツの改良に努めていく。ウェブサイト「ドイツ語発音の森」(URL: <https://fit-aussprache.com>)の過去 3 ヶ月間のアクセス(2020 年 5 月現在)を例にとると、累計 50 カ国・地域となっており、今後も世界に向けて発信していくことに意義があることが確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Mutsumi Tachikawa, Junko Nakagawa	4. 巻 11
2. 論文標題 Moeglichkeiten und Grenzen der Sprachschulung im DaF-Unterricht in Japan - ein Versuch zur Entwicklung von Lehr-/Lernmaterialien	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 In: Grenzen der Sprache- Grenzen der Sprachwissenschaft 11	6. 最初と最後の頁 139-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mutsumi Tachikawa, Junko Nakagawa	4. 巻 1
2. 論文標題 Zur Reformierung der Ausspracheschulung fuer DaF in Japan.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 FaDaF-Bandes zur Jahrestagung 2016. Fachverband Deutsch als Fremd- und Zweitsprache	6. 最初と最後の頁 197-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 中川純子、服部真子、長松谷有紀、坂井菜穂
2. 発表標題 発音教育に対する日本語教師の意識構造- 3名の教師のPAC分析インタビューから-
3. 学会等名 2019年度言語文化教育研究会第6回研究集会（山梨大学/甲府）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川純子、服部真子、長松谷有紀、坂井菜穂
2. 発表標題 日本語教育における発音学習の意義について-学習者の将来につながる発音教育のあり方とは-
3. 学会等名 言語文化教育研究会国際研究集会第7回研究集会（タンロン大学/ハノイ・ベトナム）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川純子、服部真子、長松谷有紀、坂井菜穂
2. 発表標題 外国語学習において発音を学ぶ意義とは-日本語教師の学習者としての語りから-
3. 学会等名 2019年度第13回PAC分析学会大会(金沢工業大学/金沢)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川純子 立川睦美
2. 発表標題 ドイツ語発音におけるKernmerkmale - コミュニケーションの観点から見た身につけるべき発音の力
3. 学会等名 日本独文学会春季研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川純子 坂井菜穂 長松谷有紀 服部真子
2. 発表標題 PAC分析によるインタビュー・データの 質的分析の可能
3. 学会等名 PAC分析学会第12回京都大会(立命館大学朱雀キャンパス/京都)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川純子, 立川睦美
2. 発表標題 Zur Bestimmung der phonischen Kernmerkmale fuer japanische DaF-Lernende
3. 学会等名 GAL-Sektionentagung 2017
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中川純子
2. 発表標題 Zur Reformierung der Ausspracheschulung fuer DaF in Japan
3. 学会等名 Internationale Tagung Grenzen der Sprache, Grenzen der Sprachwissenschaft
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 立川睦美、中川純子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 郁文堂	5. 総ページ数 200
3. 書名 発音・発話徹底ガイド	

1. 著者名 立川睦美、中川純子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 郁文堂	5. 総ページ数 199
3. 書名 ドイツ語 発音発話徹底ガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ドイツ語発音の森  <a href="https://fit-aussprache.com/">https://fit-aussprache.com/</a>  Aussprache und Sprechausdruck des Deutschen  <a href="https://fit-aussprache.com/de/vorwort">https://fit-aussprache.com/de/vorwort</a>  ドイツ語発音の森  <a href="http://german-klingenwald.com/">http://german-klingenwald.com/</a>  Workshop Dr. Junko Nakagawa  <a href="https://www.tuc.gr/index.php?id=6131">https://www.tuc.gr/index.php?id=6131</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----